

健康教育®

— 健康なくして教育はありえない —

「根っこ教育」栗の根はふじみっ子

— 親も子も、先生も根っこが大事 — … 結城・富士見幼稚園 園長 鮎澤 伊江



「健康教育」[®]

——健康なくして教育はありえない——

1911年、河合グループ創業者である薬学博士・河合亀太郎がかかげた企業理念です。



薬学博士・河合亀太郎

こどもたちのすこやかな成長を願い、より一層お役に立てる情報のご提供・ご提案を目指し、発刊致しております。これからも、創業者・河合亀太郎の理念「健康教育」を大切に伝え続けてまいります。今後ともご愛読のほどよろしくお願い致します。

目 次

3	「根っこ教育」栗の根はふじみっ子 — 親も子も、先生も根っこが大事 —
14	更なる「健康教育」を目指して — カワイが取り組む園舎専門の保全・改善事業 —
15	あらまし

「根っこ教育」栗の根はふじみっ子 — 親も子も、先生も根っこが大事 —

学校法人 鮎澤学園 理事長
富士見幼稚園 園長

鮎澤 伊江



富士見幼稚園の教育理念

まずは、2023年3月12日(日)に挙行了した第46回卒業式(当園では「卒園式」ではなく「卒業式」という)の一場面を振り返りたいと思います。

昨年度の卒業式は、新型コロナの段階的な制限緩和の流れを受けて、両親と祖父母ともに参列することができました。当園では、幼稚園生活の集大成である卒業式を生活保育の一環として位置づけています。つまり、最後の保育が卒業式となります。この日も子供たちが主役です。堅苦しい園長挨拶はあえて行わず、骨子を踏まえながらもその年度の子供たちの雰囲気や親の年代層を感じ取って、その場で湧き上がってくる「伝えたい思い」を率直に語りかける独自のスタイルをとっています。その一節は次のとおりです。

「(筆で描いた栗の実のイラストを見せながら)富士見幼稚園の教育は『根っこ教育』です。栗の実は、熟して地面に落ちると小動物に拾われて食べられてしまうでしょ。なので、リスやネズミに食べられないように頑張って土の中に根を張り、芽を出すのです。ふじみっ子も同じです。これから先、小中高などを経て大人になるまで、多くの困難にぶつかってもめげない『やればできるふじみっ子』精神で這い上がることのできる人間に

なっていてほしいと願っています。その基本は『強い根っこを生やすこと』です。教育理念の一つとしてずっと力を注いできました」

また、卒業式会場の壁面には、

「遊んだ数だけ花開く」

「子供は親を選べません」

「やってみよう 試してみよう」

などと書かれた色紙が飾られています(他にもたくさんの言葉があります)。一枚一枚の色紙には卒業生の顔写真が貼られ、小さな手型が押されています。これらの言葉はすべて、私、園長からの贈り物です。日々の園生活において、根を生やすために、このような言葉がけをいろいろな場面で続けてきました。

戦後経験を踏まえた 幼児期からの人間づくり

はじめに、私が「根っこ教育」の必要性を感じた時代的な背景を説明します。

昭和17年12月、太平洋戦争の真只中、私は東京浅草の山谷に生まれました。浅草山谷界限はそれまで旅人の旅館でしたが、戦後は、戦争孤児たちが上野の山から山谷の宿に仮住まいを始め、その後、山谷は宿住まいの街になりました。サラ金で家を追われた人、安保闘争で住所不定になった人、社会の変化について行けない人…彼

らの仮住まいとなった山谷はどんどんスラム化していきました。アルコール中毒の人や病気になった人は仕事に就くことができず生活保護となり山谷の街を一日中ぶらつき歩く、そんな、事情はどうあれ、社会からこぼれ落ちてしまう人々を当たり前のように目にすることが日常の風景となっていました。

幼かったとはいえ、この山谷の大人社会を目の当たりにした体験は、幼児期から人としての生活基盤をきちんと築いていくことがいかに大切かということ、私の心に刻印のように焼き付けました。昭和36年、19歳で茨城県結城市に土地を購入し、理想の幼児教育を志す準備を始めました。山谷で痛感した親子関係の重要性を踏まえて「親と先生がともに学ぶ」をモットーに、根っこ教育を志し、34歳の時に富士見幼稚園を創立しました。

私の母方の弟がお寺の住職だったことから仏教に触れる機会が多くあり、そのなかで著名な教育者でもある無着成恭先生の教えに出会い、感銘を受けて、「生活綴り方」を手本に親への啓蒙も促しました。冒頭の「子供は親を選べません」や「親は親として人間であって欲しい」という言葉は、無着先生の教えから影響を受けたものです。

富士見幼稚園の遊びと学び

当園では、日常の保育の他に、遠足やお泊り保育、プレイパークなど、一年をとおしていろいろな活動を行なっていますが、これらはすべて園生活の一環であり、特別なことは何一つありません。ただその一つひとつに「仕掛け」をつくり、遊びをとおして学べる工夫をしてきました。以下、当園における具体的な根っこ教育の取り組みをいくつか紹介します。

森のようちえん 「ふじみっ子キャンプ場」

2011年3月11日(3.11)に発生した東日本大震災の教訓は大きいものでした。電気やガス、水道などの生活インフラが使えなくなり、連絡手段も制限された時に、私たち大人は子供たちを守りきれぬか不安になりました。そしてもう一つ、3.11で印象的だったことは(1995年の阪神淡路大震災の教訓を活かして)おにぎりが配られたことです。阪神淡路大震災ではお米を配ったのですが、自分で炊ける人が少なくお米がたくさん残ってしまいました。炊き方を知らなくても食べられるように3.11では既製品のおにぎりが配られました。小枝があればご飯を炊けることを知っていた私は驚きました。同時に、いつ起こるのかわからない災害に備えて一人ひとりが生活の知恵を身に付けるとともに、災害時に子供たちを守るための場所を確保することが必要だと考えました。

そこで1979年に土地を購入していたもののそれまで活用していなかった、園から1.8km(子供の足で徒歩30分)の場所にある森林をキャンプ場にしよう、と思いつきました。

キャンプ場では、生活の知恵が身につくだけでなく、私たちの行動が制限された2020年以降のコロナ禍においても格好の遊び場でした。それまでは遠足や園外行事などを中心に日々の生活範囲を広げて子供たちの体力づくりの機会を設けていましたが、コロナ禍によりそれが難しいなか、キャンプ場なら同じような諸活動を再現できます。木々に囲まれているので周りを気にする必要もなく、土遊びでは免疫を付けられ、井戸水を沸かせば水が飲め、かまどで小枝と落ち葉を使えば火を焚くことも容易です。地盤は石でできているので土砂崩れの心配もなく、高台に位置しているため水害のリスクもありません。

キャンプ場は子供たちや先生だけでなく親子でも利用できます。一般的なキャンプの場合、遠方へ出向き準備から片付けまで多くの労力と体

力を必要としますが、ふじみっ子キャンプ場は幼稚園の近くにあるので誰でも気軽に訪れて遊ぶことができます。園外保育の場でもあるので、親御さん以上に多くの知恵を持っている子供たちはその知恵を教えたり、一緒に野外活動に取り組んだり多くの発見や学びもあるでしょう。

2019年(令和元年)5月にキャンプ場が整備されて以来、月に1、2回ほど子供たちのリクエストでキャンプ場保育を行なっています。2023年3

月には、廃車となった園バスを移設して、座席を取り外し寝泊まりできるように板を敷くなど、新たな仕掛けも加わりました。これからどのような発見や学びが生まれるのかますます楽しみです。



ふじみっ子キャンプ場

ホンモノを体験する遠足と 赤い園服

コロナ前に実施していた東京遠足では、赤い園服をまとった小さな団体遠足客であるふじみっ子たちを、訪日外国人旅行者が必ずと言っていいほど写真に撮っていました。彼らには「日本の珍しいもの」の一つとして映っていたのかも知れません（なお、原則として遠足に親の付き添いはありません）。

「赤」は元気が出る色なので、元気いっぱいの子供たちを象徴する園服の色としてうってつけだと創立時に考えました。ただ当時は土地柄もあってか「少し目立ちすぎる」「園服らしくない」と言われたこともありましたが、さすが完成した赤い玉虫色の園服はとても可愛らしく、やはりこの色にして良かったと確信しました（しかも都会に行けば人気者です!）。そんな園服を着て、年少組（三歳児）は片道約2時間の電車に乗って上野動物園へ行きます。年中組は東京スカイツリーや浅草周辺などを散策します。年長組になると少し足を伸ばして横浜へ、赤レンガ倉庫から山下公園、中華街などを巡ります。さらに年長組は劇団四

季『ライオンキング』を約3時間かけて観劇します。長い時間電車に揺られ、多くの人々が行き交う都内等の遠足はハラハラドキドキの連続ですが、それ以上に子供たちの楽しみや感動につながる何よりも貴重な体験となります。

私は「ホンモノ」に触れる体験をとおして、その場で直接に子供たちが見聞きしたこと、そのとき感じた気持ちを大切にしてほしいと思っています。ネットやAI、メディアなどを使えば大量の玉石混交の情報を簡単に得ることができますが、まさに百聞は一見にしかず、実際に五感を駆使して感じ取ることに勝る深い学びと感動はないでしょう。

ホンモノの教育は生涯記憶に残ります。記憶はエネルギーになります。そのエネルギーが深い根っことなり心の豊かな大人に育つのです。本物教育は遠足に限らず、日々の園生活でも取り入れています。

ふじみっ子で迷子になる子は今までの46年間で1人しかおらず（赤い園服のおかげで数十秒後にすぐに見つかりました）、遠足先で騒いだり走り回ったりする子も一人もいません。幼児期に「遊びをとおして学ぶ」ことを大切にしています



赤い園服で観劇

が、生活・しつけの指導も重要です。勉強は小学校からでよいのです。「遊んだ数だけ花開く」幼児期だからこそ根っこを増やすことが大切なのです。

公共施設では走り回らない、電車では他のお客さんもあるので迷惑にならないよう静かにするなど日々の保育においても良いこと・良くないことをしっかり伝えます。そうすることで子供たちは我慢することを覚え、それが根っこになるのです。だからこそ、本物に触れる教育と体験は根っこ教育に必要不可欠と考えます。これからも本物を追い続ける一人の人間、先生、園長でありたいと思います。

手作りの食育 「命をいただきます」

幼稚園には動植物と共生する環境が整っています。食事は、生き物の命をいただくので「感謝していただく」ということを大切にしています。家庭に生き物がいない環境で育つ子供が増えていますが、幼稚園で動植物とともに暮らす体験を重ねることで生き物に感謝する心が芽生えます。それは子供から親へ伝わります。それぞれの家庭からさまざまなところに伝播して命の循環が始

まります。

富士見幼稚園の子供たちは三歳児の終わり頃、カレーの仕込みをするときに包丁を持ちます。野菜のヘタを実とのギリギリの境目で切り、ヘタは肥料にします。幼稚園の畑で採れた野菜には土がついていたり虫食いがあったりします。その土を、水を無駄にしないよう水を張ったバケツの中でしっかり落とします。新鮮な野菜をふんだんに使い、自分で切って作ったカレーは絶品です。野菜嫌いだった子も嘘のようにきれいに食べ終えます。なるべく農薬を使っていない食材を選び、電気は一切使わず、かまどでグツグツと煮込んでつくる「ふじみカレー」には、みんなのパワーが入っているのです。

自分で栽培して・調理して・食べることで、子供たちは一体いくつの「気づき」に遭遇していることでしょうか。私は無限大だと思います。だからこそ「おいしい!」食育、命をいただく食育は、園生活の中心と言ってもいいほど大切な要素の一つなのです。

幼稚園の食育は週に3回あります。年長組になると、残す子や好き嫌いで食べない子は一人もいなくなります。理由は二つです。一つは、「みんなで食べるごはん」がとっても美味しいこと。もう一つは、一口だけでも食べようと先生が声かけ



包丁を使ってカレー作り



園庭のエノキの下で友達と一緒にごはん

をして「一口は食べる」精神が根付いているからです。

園庭の大樹であるエノキの木陰の下で友達と一緒に食べるごはんほど美味しいものはありません。印象的なエピソードとして、家ではどんなに工夫しても残したり食べなかったりするのに、幼稚園の食育メニューだと残さずおかわりすることもある、という親御さんの驚きの声を時々耳にします。決して特別なことはしていませんが、みんなで食べるご飯は美味しくて楽しい、それは子供も大人もみな同じなのです。当園の食育は子供たちにとってかけがえのないものであると感じた瞬間でした。

先生が「これは〇〇くんが種から大事に育ててくれた野菜だから残さず食べようね」と声かけすることで子供たちは野菜をじっくり見つめ、さらに周りの子から「美味しいよ」と言われることで一口食べてみようと思います（無理に食べさせることはしません）。がんばって口に入れても得意な子はしかめっ面をします。でも、食べることが

できた!という自信が大切だと考えています。

こうして、食物という命をいただくことがどれだけ大きなことか、多様な食材を好き嫌いなく残さず食べることがなぜ大切なのかを子供たちは体感します。自分で育て調理して食べるという体験があるからこそ、五感を刺激する出来立ての料理のにおいに感動できるのだと思います。そういう日々の食環境や先生たちの何気ない配慮が程良く溶け合いながら、当園の食育は繰り広げられています。

小さな町の客車劇場、 園内の乗り物

乗り物に実際に近づいて見たり触れたりする機会はほとんどないかもしれませんが、富士見幼稚園には、客車が1台、消防車が1台、船が4隻、貨物車両が1台あります。もちろんすべて本物です。園には乗り物博士がたくさんいます。みんな乗り物が大好きです。遠足で園バスに乗っ



園庭の客車

ていて、走り抜ける新幹線を見つけると「こだま
〇〇号!」と我先に教えてくれます。

浅草生まれの私は、神田の交通博物館に乗り物を間近でみられる場所があることを知っていたので、遠足の途中に立ち寄ったりしたこともありましたが、多くても年に1、2回というのが現実です。そこで、園内に本物の車両や乗り物を置いてしまおう!と考えました。

とはいえ、思いだけで実現するほど簡単なことではありませんが、その数年後に、浅草育ちの強い意志と結城市とのご縁に恵まれて車両を園内に設置することができました(浅草の家の前にも当時、街中に都電が通っていて、その夢のような風景を園内にも作りたいと強く願っていました)。

その第一弾が「スハフ42型2052」です。たまたま読んだ教育雑誌の記事で、バスの中に図書館を作った東京・日野市の事例があり、私もそれに触発されてぜひ客車図書館を作りたいと思っていました。長めの車両を探していたので、まずは当時の国鉄に相談したところあっさりと断られました。一般市民はそもそも車両を買うことができなかったのです。どうしようかと悩んでいると、しばらくして結城市に廃車両の譲り受けのオファーが来たという話を聞きつけました。私は千載一遇の好機だと思いました。どこからも車両購入の意向がなかったため、幸運にも市から車両を譲り受けることができたのです。

車両があった小山駅から当園までは二駅分ほどの距離になりますが、実際の車両運びは、生活

の基盤を支える電線を誤って切らないように神経をとがらせながらの、大人30人+計2時間を要する大移動でした(かかった費用は合計150万円ほど)。

こうして昭和56年11月に客車スハフ42型2052号が無事に幼稚園に到着しました。到着してからは、車両の内部を図書館と舞台に変えるための大改造が始まりました。NHKの人形劇番組に関わっていた専門家に頼んで設計図を描いてもらい、在園児の父親を総動員して掃除や本棚作り、ペンキ塗りなどを同時に進めていきました。約2週間後、世界でたったひとつの客車劇場が完成しました。客車劇場の公演は現在に至るまでの43年間で計83回行ないました。普段は客車図書館として絵本借りや読み聞かせなど、保育のなかで活用されています。

たくさんの思いが詰まった客車以外にも、園内には、市内の江川分団(消防団)から払い下げてもらった消防車や地元の魚屋さんから譲り受けた船、中弾寺湖よりいただいた小型船、猪苗代湖よりいただいたクルーズ船、埼玉県大宮市(当時)の車両操車場より購入した貨物車両など、いろいろな本物の乗り物があります。今も子供たちの絶好の遊び道具となっています。

ホンモノは子供時代の夢を実現させるきっかけになります。カッコいい!と思った乗り物への憧れを幼稚園で体験できるようにする、それも私の願いの一つです。本物は私たちに何かを訴える



客車劇場



消防車で遊ぶ

力を持っています。その力に触れる時、人は生きる力を感じ取り、それぞれの夢に向かって動き始めるのかもしれませんが。

『きかんしゃやえもん』という絵本から影響を受けて、古いものでもホンモノは大切に再活用するという「根っこ」が私の心から生えてきたことを振り返れば、実車両や実物、本物へのこだわりは、私自身の考え方・生き方の根幹であり、これからも変わることはないでしょう。さらなる夢の実現に向けて、私のホンモノ集めはまだまだ続きそうです。

まるでなんでも屋さん!? 富士見幼稚園の先生たち

昨年度、約20年間走り続けてくれた園バスが廃車となりました。新しい園バスはピカピカで真っ白なので、園のトレードマークである赤茶色に塗る必要がありました。車両の価格とは別に、塗装代を業者に聞いたところ塗装だけで約30万円、文字を追加するとさらに5万円かかると言われ、想定していた予算を超えてしまったので他の方法を考えることになりました。その際、園の修繕を担当するCさんが昨年描いた見事な絵画を思い出しました。当園卒業生のペンキ屋さんにペンキを注文して、先生たちが総出でバスの塗

装に取り組みました。新車ということもあり、先生たちも私もハラハラドキドキでしたが、作業を始めてからは初めて体験する車体へのペンキ塗りの仕事に面白さを覚えることの方が多くなりました。塗装に5日、さらに文字を書いたり微修正を加えたりで一ヶ月ほどかかりましたが、なんとか先生たちだけの力で塗装を無事終えることができました。

時間はかかったものの、半信半疑で始めたペンキ塗りも皆で力を合わせることでできる何でもやってみればできるのだと確信しました（費用は材料費の4万円のみ）。

「やればできるふじみっ子」の精神を伝えるのは、私たち先生から。今回のバス塗装は、また一つ自信につながる貴重な経験となりました。

現在の便利な世の中では、とくに若い先生たちは壊れたら専門家や業者に直してもらおう、ということが当たり前になっています。精密機器などは別にして、実は自分たちだけでも身の回りにあるものを工夫して使えば直すことができるのです。そのためにまずは挑戦してみることが何よりも大切です。

改修後のイメージを描き、必要な道具と材料を園内からかき集めて自分たちでやってみる、先生たちも日々学びながら知恵を身に付ける生活を送っています。



園バスを先生達で塗装



結城の地と共生 「藍染と鯉のぼり」

私の明治生まれの母は子供3人をたくましく育てあげた立派な存在です。私が高校3年生のときに父が船の事故により他界したため、それから女手一つで育ててくれました。そんな母はよく家の釜で染め物をしていました。

その記憶から、5月行事「鯉のぼり」を藍で染めることを思いつきました。ただ全長3、4メートルに及ぶ鯉のぼりの染め方についての知識がなかった私は、いろいろな人に相談して回りました。すると当園の初代PTA会長である稲葉夫妻（奥さんの里子さんは現結城市議会議員）が染物屋を営んでおり、そのご縁で染め方を教えてもらう



藍染をする子供たち

ことになりました。また一つ、結城市でのご縁に感謝する瞬間でした。

鯉のぼりの藍染は、親子共同作業のイベントにもなっており、皆で楽しみながらデザインします。ネットで調べて凝ったものを作る人もいれば、無造作に形を作る人もいて個性が出ます。藍で染めた後、デザインに使った輪ゴムや割り箸を取り外して作り出された模様は見事で、あちこちで歓声が湧き上がります。最初から最後までワクワクした気持ちになるのが鯉のぼり染めの醍醐味です。

10年前からは鯉のぼりだけでなく、染めTシャツ制作も始めました。第二の園服として、色は遠足などの行き先によって目立つ色を使い分けられるよう、オレンジ色とわさび色の2色で染めます（山であればオレンジ色、町中であればわさび色といった具合です）。藍には虫除けの効果もあるので一石二鳥です。

子供たちは自分で作ったTシャツと言うこともあり愛着をもって着ます。子供たちだけでなく希望する人は家族用にも作ることができ、家族全員で染めTシャツを作り私服としてお揃いで着る家庭もあるようです。保護者の家族は出かけた先で染めTを周りの人に褒めてもらった、と喜んで様子で報告してくれました！

令和4年度には当園の鯉のぼりが栃木市立美



藍染のこいのぼり

術館の開館記念にあわせてオープニングのインスタレーションとして展示されました。どんな模様になるか楽しみにしながら手作りした迫力のある歴代の鯉のぼりが、藍染がテーマの『とちぎを藍で染める』展示会の一部として飾られたことはとてもうれしい出来事でした。

毎年鯉のぼりの季節に合わせて藍の種をまいて藍を育てています。生活の知恵と、結城市の染めと織りの伝統を継承する藍染めを、これからもしっかりと後世につないでいきたいと思います。

がんばれ！ 5回コマまわし

富士見幼稚園の生活では、コマまわし・縄跳び・粘土遊び・泥団子などの昔ながらのあそびも日常的に行われています。昔あそびから得られるメリットはたくさんありますが、とくにコマまわしにおいては、コマに紐を巻いて手首をまわして思いつき投げて引くという運動を繰り返すことで自然に筋肉がつき、正しく箸や鉛筆を持つことができるようになります。さらにコマまわしは、手首や指先を細かく動かすので、目と手の協調性

や全身のバランス感覚を育てるなど、子供の発達にとっても良い効果があります。手先が器用になる、脳が活性化する、集中力が上がるなどの効果も得られます。

当園にはコマを使った恒例行事として「5回コマまわし」があります。コマを5回連続でまわせると「名人」として認定され缶ゴマがもらえるというものです。しかも最後の5回目は友達全員に囲まれてコマをまわします。人前に立ってドキドキした気持ちと、成功させたいと願う集中した気持ちが入り交じる中、周りの「がんばーれ!」という声援に合わせて勢い良くコマを投げます。5回目が成功するとみんなが拍手喝采、満面の笑みで園長から日付と名前と「5回まわし」と書かれた缶ゴマを受け取ります。

人前に立って注目を浴びながら何かをやり遂げる経験は、きっと将来、役に立つと思います。集中力や度胸、本番での強さなど、さまざまな要素を同時に必要とするからです。そこで「できた!」と成功体験を積むことが大きな自信となり、次の挑戦にも臆することなく挑めるようになるのです。卒業生の一人が「剣道の最後の一本でね、いつも『やればできる』と念じていたんだ」と教えてく



コマまわしガンバレ!

れたこともありました。

令和2年度の卒業式では、修了児の一人がふと「やればできるふじみっ子、やればやるほど上手くなる」と言ってくれたことが強く印象的に残っています。私は「やればできる」をひたすら子供たちに語りかけていましたが、子供自身は実際の生活経験から、やればできる以上のこと、「やればやるほど上手くなる」ということを学び取っていたのです。

毎日の積み重ねから自然発生的に出てきた五歳児の一言に、私自身も新たな学びを得ることができました。「やればやるほど上手くなる」という言葉を彼からいただけたことは本当に園長冥利に尽きる感慨深い体験であり、今も心から感謝しています。



終わりに

人間は健康であってはじめて何かを成し遂げることができます。「根っこ教育」もその根幹にあるのは丈夫な心と体です。子供たちは周囲で起こるさまざまな事象に気づき、興味関心を持ち、意思を持って行動します。そのことにより子供たちのより良い成長と発達が促されます。

その実現ために、年齢に応じた人間づくりや体力づくりなどの、丸ごとの人間教育・環境設定が必要だと私は考えます。「遊んだ」数だけ花開く、が幼児期です。戦後の山谷の光景をとおして幼児期の人間教育に携わろうと決心したのが60年前、それから今日に至るまで、毎日のように、親と子と先生がともに学び、ともに遊ぶ日々を送っています。

栗の根のように、子供たちの中にしっかりとした根を生やすために、私の栗の根教育の実践はこれからも続きます。当園の取り組みが少しでもみなさんの健康教育の一助となれば幸いです。



園庭でのびのび遊ぶふじみっ子

更なる「健康教育」を目指して

ーカワイが取り組む園舎専門の保全・改善事業ー

カワイクリーンSAT

健やかな保育環境を創出する

私たちカワイクリーンSAT(サット)は、園舎の保全・改善を通じて、「将来を担うこどもたち」を健康にすることを目的とした幼稚園・保育園専門の環境衛生事業です。保護者の皆様からの幼稚園・保育園への期待・要望は年々多様化し、特に安全や衛生に関わるものは本当に多岐に及んでいると実感しております。

現在、カワイクリーンSATでは東京近郊を中心に、600園を超えるお客様とお付き合いさせていただいており、各園の特徴をきめ細やかにつかみ、その環境に適した改善・保全のノウハウを蓄積することで、より安全で快適な環境づくりのお手伝いを行なっております。衛生的な砂場、トイレ、エアコンを中心とした技術の醸成はもちろん、保育中にも安心して施工をお任せいただけるよう、スタッフマナーの向上に日々努めております。



砂場保全を通してこどもたちの成長を見守る

年間を通して、砂場保全はこどもたちにも大人気な作業です。私たちが作業を開始すると、こどもたちが興味津々に、続々と集まってきてくれます。先生方からよく『作業の邪魔になるから申し訳ないです。』と仰っていただく事が多いのですが、全くそんな事はありません。作業の見学はもちろん、状況次第で一緒にお手伝い体験をしていただく事もあります。その体験が大切なこどもたちの思い出作りや、新しい経験の一つになれば嬉しい限りです。

カワイクリーンSAT(高橋)

カワイクリーンSATのブログ紹介

埼玉県の間宮へ訪問した時のことです。車から道具を降ろし砂場へ向かっているとかなり遠くから熱い視線が…。なんと、たくさんのこども達がとてもお行儀よく座っているではありませんか!

これからどんなショーが始まるんだろう!なんだろう!誰だろう!と私達を待っていてくれたのです。あんなにキラキラした目でこちらを見つめられると、私達も自然と張り切っちゃいます。

初めて見る大きなふるい。初めて見る大きなスコップ。こども達は興味津々です。ふるって落ちた砂が溜まって山になり、「わー!大きなお山!」と大興奮。中には、「かき氷だー!」と表現することも。こども達の想像力は無限ですね。

大きなお山が何個も出来て、最後にみんなでお山に登ってみました。「いっちに、いっちに!」登頂大成功!今回はとても沢山のこども達が興味津々に砂場作業を見てくれました。

お行儀良く見たり聞いたりしてくれるそのフォローには先生方の存在がとても大きかったです。

また環境改善・保全を通じて元気なこどもたちに会えるのを楽しみにしております。

カワイクリーンSAT(河口)



カワイクリーンSATのブログはこちらから >>

カワイクリーンサット株式会社

東京都中野区中野6-3-5

TEL.03-3365-1110

(土、日、祝日を除く10:00~17:00)



■執筆者紹介

鮎澤 伊江(あゆさわ よしえ)

昭和17年、東京・浅草生まれ。学校法人鮎澤学園理事長、富士見幼稚園園長。客車劇場のオーナー、たんぼ庵(お茶室)庵主、駄菓子とおもちゃのコレクター、リサイクル家、ままごとやおりゃんせ店主、おもちゃ図書館館長、ふじみっ子キャンプ場オーナーでもある。

聖徳保育専門学校と白梅短大保育専攻科を卒業後、道灌山学園で保母免状を、東洋大学で養護教諭資格を取得。幼少年教育研究所、上野動物園内子ども動物園、千代田区立永田幼稚園、千代田区立番町幼稚園、北区立豊川幼稚園、北区立豊島幼稚園、中野区立かみさざ幼稚園などで実践を積み、1977年に富士見幼稚園を創立。

著書に「メルヘン列車出発進行!」「童のいのり」「幼児教育知の探求3〜『子どもの真実に目を向けて』」など。

ソニー幼児教育支援プログラム論文で「努力園」を2回受賞、第1回読売ブルデンシャル福祉文化賞で「奨励賞」を受賞。2019年、東京藝術大学美術館とうらわ美術館で作品を展示、はらぺこあおむし50周年フォトコンテストで大賞を受賞。

■協力園

表紙:学校法人鮎澤学園 富士見幼稚園(茨城県 結城市)

■「健康教育®」 あらまし

こどもたちのすこやかな成長を願って創刊された季刊誌「健康教育®」。

1956年の創刊以来、創業者・河合亀太郎の信念を伝え続けております。

読者対象/日本全国の小中学校・幼稚園・保育園の学校長や園長を始めとする先生方・保健主事・養護教諭・給食関係者など。

平素より「健康教育®」をご愛読いただきまして、誠にありがとうございます。

編集部では、皆様のお役に立つよりよい紙面づくりを目指しており、皆さまが実践されている健康教育の参考にいただければ幸いです。ご覧になりたい内容やテーマ、また各園・学校紹介(例:当園では、健康教育の一貫として、このようなことを行っています等)、そのほかご意見・ご感想がありましたら是非当社お問い合わせフォームより問い合わせください。

健康教育に関する問い合わせ(ご意見・ご感想)フォームは、右側の二次元コードよりご利用いただけます。



お問い合わせ・ご連絡先

河合薬業株式会社 「健康教育®」編集部

〒164-0001 東京都中野区中野 6丁目3番5号

TEL: 03-3365-1110 (代) FAX: 03-3365-1180

E-mail アドレス: genkikko@kawai-kanyu.co.jp

ホームページアドレス: <https://www.kawai-kanyu.co.jp>

「健康教育」のバックナンバーは、右側の二次元コードよりご覧いただけます。



肝油ドロップ

Since 1911



ビタミンC肝油ドロップ
— 3000粒入 —



肝油ドロップ
— 3000粒入 —



カルシウム肝油ドロップ
— 3000粒入 —

※これらの商品は教育機関向け団体専用の商品です

カワイ肝油ドロップ presents
よ・み・き・か・せ 「カワイ肝油ドロップ presents よ・み・き・か・せ」コーナーでは、
こどもから大人まで楽しめる絵本のよみきかせを行なっております。

番組詳細

Tokyofm ■ TOKYO FM [FM80.0MHz] 『山崎怜奈の誰かに話しかったこと。』内（月～木曜日 14:30頃～）
FM大阪 ■ FM大阪 [FM85.1MHz] 『intense!』内（月～木曜日 18:00頃～）

 **園児様のうたが番組内で放送されます** 

番組内では、園児様が歌う「肝油ドロップのうた」を募集しています。右側の二次元コードよりご応募ください。

